

寄生虫対策の考え方について

静内診療所 前田昌也

少しずつ雪解けがすすみ、放牧地に新しい草が目立つ季節になってきました。新生仔馬の病気が増えるとともに、寄生虫に対しても気を遣う必要があります。

私自身これまで「駆虫はとにかく怠ってはいけない。高価かもしれないがしっかり駆虫薬を与えるように」と説明することが多かったのですが、駆虫薬に対する耐性を獲得した寄生虫の問題が世界で浮上してから、専門家からは様々な提言がされています。

その中でも①「必要以上の回数・不要な時期まで駆虫薬を使用してはいけない」一方で②「一度の駆虫における投与量を少なくしてはいけない」という二点は柱となる原則だと受け止めています。

まず①は上記にある以前の私の考え方と異なるわけですが、回数が多いほどしっかり駆虫できるというわけではない。一方で、薬剤耐性を促進するきっかけにはなってしまう。だからこれでもかと駆虫を頻繁に実施するのは避けていかなければいけない、必要十分に駆除できる間隔と時期を守るべきということになります。近年の成書やガイドラインの例を挙げると、生後12ヶ月（1年）で4回だとか、生後15ヶ月で4～5回などが謳われており、成馬では必要な回数が減ります。

一方、②は以前の方針に近いものです。少ない用量で使用することは耐性を生み出す要因になることが分かっているようです。したがって駆虫を実施するときは中途半端ではダメで、馬体重に基づき適切な量を投与しましょう。関連して、最初に実施する駆虫については確実に駆除できるように、耐性が危惧されている薬剤は選択しないほうが良いともされています。



具体的な製品名を挙げるほうがわかりやすいかと察しますが、販売面等に影響する話は難しいため今回は控えさせていただきます。かかりつけの先生と相談の上で何を使用するか決めましょう。

日高の地に完璧に当てはまると言えるのかどうかかわからないかもしれませんが、これからまた変わるのかもしれませんが、また国内で入手できる馬用の駆虫薬にも限りがあり、世界で言われている通りにできないこともあるかもしれません。そんな中でも、考え方はある程度把握しておくことが望ましいでしょう。

参照

AAEP Parasite Control Guidelines
緑書房「馬の寄生虫対策ハンドブック」